

パラリンピックで考えたこと

自称体育会系の私(最近はおっぱら観戦派ですが)としては、興奮しまくりのリオオリンピックに引き続き開催されたパラリンピックにもしっかりとハマり、連日のTV放送を追っかけてしまいました。普段あまり馴染みのない障がいを持つ人のスポーツを観ることは、初めて観るスポーツもあり、とても面白かったし、新しく知ることたくさんありました。

例えば、バスケットボール。選手は皆、車いすに乗っていますが、障がいの程度によって選手はポイント(「重度 1.0=背筋・腹筋の機能がない」から「軽度 4.5=車イスの上では自由に動ける」)を持っていて、同時にコートに出られる5人の選手の合計ポイントは14ポイントを超えてならない。重度の障がいを持つ選手が試合に出ることを妨げないことを目的にしたルールだそうです。障がいの程度が異なる選手が、一定のルールの下で、お互いのいいところを活かし、足りないところを補い合いながら試合をする姿に胸を熱くしてしまいました。その他の種目でも障がいの種類や程度によってたくさんのクラスがあることを知りました。

そこで考えたこと。私たちは、障がいを持つ人を「障がい者」とひとくくりにし、当たり前のように健常者と障がい者を区分しますが、障がいを持つ方々にはそれぞれ障がいの程度があるという当たり前のことを改めて教えていただきました。

横一本に線を引いて、一方の端に「健康で健常」、その反対の端に「病気や重度の障がい」と書く。あなたはどこに自分を置きますか? どこからどこまでが健常・健康で、どこからが病気・障がいなのか?と考えると、実は、明確な縦線は引けないことに気がつきます。私たちは皆、そのライン上のどこかにいる。縦線を引いているのは人間の意識であって、実相はつながっているということではないか?と。(もちろん、障がい者の場合には、社会の仕組みとして、障がい者支援のために障がい者として認定する制度がありますし、それは必要なことだと思います。)

私たちはどうもレッテルを貼ることが好きなようです。健常者、障がい者というレッテル、敵味方というレッテル、保守、リベラルあるいは右、左という主義主張の違いによるレッテル…。本当はつながっているのに、境界線を引いているのは人間の意識。人間には、レッテルを貼ることで自分の立ち位置を確認して安心したいという本能があるかも知れません。しかし、異なる考え方や嗜好を排除することは、対立を促しはするが、決して共生にはつながらないと思います。

自分の考えや嗜好を持つことは当然必要です。しかし、同時に他人にもその人なりの考えや嗜好があることを知り、それを否定するのではなく(もちろん、全てに賛同する必要はないと思いますが)その違いを認めること。はやりの言葉では多様性というのでしょうか?それが、結局いろいろな人の知恵や力を活かすことにつながるのだらうと。そんなことを感じたパラリンピックでした。

多種多様な人が暮らし商う場であるまちをつくることも、利害関係や考え方が様々な会員さんから成る商工会議所の仕事にもまさに同じことが言えるなど思った幸いです。

会頭 鈴木悌介